

「食い物の恨み」の人類学

栗田博之

人類学者というのは因果な商売である。何故か。人類学者には、異文化において長期間の現地調査（フィールドワーク）を行なう事が使命として課されているからである。調査を行なう人類学者は「出来る限り現地の生活に参加しなければならぬ」とされる。具体的には、「毎日現地の人々と起居を共にし、同じ物を食べる」というわけである。住居の方はまあ何とかなる事が多いが、こゝと食べ物の話になるとそうはうまく行かない。人類学者の調査地は、所謂僻地と呼ばれ、自給自足経済が基本となつてゐるような場合が多い。当然、外部からの物資など非常に限られており、食べたい物があつても「ちよつと行つて買つて来る」事など出来ない。勿論、お金さえあれば好きなものを自由に手に入れる事も可能はずだが、理不尽な事に、人類学者は大抵「貧乏」である。従つて、多くの人類学者は、はからずも先の「現地の人々と同じ物を食べる」というテーゼを実践するはめになる。

そして、現地調査を終えた人類学者同士の会話で、「オレはこんなものまで食つたゾ」と自慢し合ひ、「あの苦しかった生活」の慰めとするのである。ヘビ、トカゲ、カエル、ネズミ、サルなどは当たり前。この程度では、戦にはまず勝てない。やはり、決め手は地虫の類である（ちなみに、私の切り札は、長さ10センチ以上もあるクワガタの幼虫である）。しかし、単なる自慢話だけでは、「あの苦しかった生活」に報いるには十分でない。そこで、人類学者は食自体を研究対象として取り上げ、適当な分析を加えて、自らの研究業績の中に取り込んでしまい、何とかカタキをとるのである。食も文化なのだから、「文化」人類学の立派な研究対象となるのである。

ここで、「食が文化である」という点に多少注釈を付けておこう。文化人類学では、伝統的に（という事は、現在ではかなり時代遅れの感を免れないのだが）、文化を「特定の人間集団によつて習得され、共有され、伝達されるもの」、

即ち、所謂生活様式全般として、非常に広い意味で定義する。食がこの定義の中に含まれるのは当然である。人間は生得的に摂取可能なモノ(道端の石は含まれないが、地虫は含まれる)をすべて食しているわけではない。子供は親から何が食べ物で、何が食べ物でないかを「習得」し、それを子孫に「伝達」する。個人的な偏差(好き嫌い)を除けば、同じ文化に属する人は大体同じような物を食べ、同じような物を食べない。同じ「食べ物」観が「共有」されているのである。そして、文化ごとに、何が「食べ物」であるかは異なっている。人類学者の「あの苦しい生活」は、或る文化での「食べ物」は、或る別の文化では「食べ物」ではない、という事を雄弁に物語っている。

では、人類学者はどのように食にアプローチするか。残念ながら、様々な立場があつて、簡単に要約する事は出来ない。生業(どのように食べ物を手に入れるか)、経済(どのように食べ物を交換したり、売買したりするか)、社会(どこで、誰と一緒に食べるか)、宗教(食物禁忌の問題)、象徴(食べ物に対する意味付け)、その他様々な側面から分析を加える事が出来るのである。そこで、ここでは代表的な研究を紹介するにとどめたい。まずは、あのレヴィーストロースの「料理の三角形」(『レヴィーストロースの世界』)という論文。彼の構造分析の技が冴え、技が冴え過ぎた結果、何が何だかよく分からない論文。ともかくにも、斬新である。蛇足だが、レヴィーストロースも南米アマゾンで食べたバターのように

な味のする地虫という切り札を持っている(『悲しき熱帯』)。次に、生態人類学の分野で文化唯物論を強硬に唱えるマーヴィン・ハリスの著作(『文化の謎を解く』『食と文化の謎』)。これも非常に斬新である。ガチガチの唯物論者で、彼にとつては、生産様式(即ち、食べ物?)が文化全体を決定しているらしい。彼を敵視する人類学者も多いが(ちなみに私もその一人である)、アメリカでは一般庶民に特に人気がある。「なぜインド人は牛を食べないか」、「なぜイスラム教徒は豚を食べないか」、「なぜアメリカ人はハンバーガーが好きか」など、とにかく面白い。日本人の人類学者の中からは、食文化の専門家と自他ともに認める石毛直道の著作(山のようにある)。確かに食文化の専門家には違いないが、果たして彼の著作が研究業績として認められるかどうかは疑わしい。まあ、エッセーとして気楽に読める事は確かである。世界各地の様々なレシピや調理法を知りたい向きには、『人類学者のクッキングブック』という翻訳本が最適。エスニック料理に強い森枝卓士の著作も山のようにある。その他、東海林さだおのフィールドワークに基づいた一連のシリーズ物や、玉村豊男の著作、佐原秋生の一連のレストラン批評もオススメ。「何だ、人類学者の本じゃないじゃないか」という声が聞こえて来そうだが、「クワガタの幼虫を頭からガブリ」などという話で食欲がなくなつた向きには、これらの著作が清涼剤として必要となるに違いない。以上、変な読書案内でした。